



# 坪内逍遙集

杉浦非水装幀

改  
造  
社  
版

昭和四年六月十三日印刷  
昭和四年六月十五日發行

現代日本文學全集 第二篇

著者 坪内雄藏

發行者 山本美

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ二



發兌

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

改造社

振替東京八四〇  
電話芝(43) 四三二二番番番番番

# 「坪内逍遙集」目次

## 卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)……………三

## 讀み本體

桐 一葉……………三

## 脚本

役の行者……………七  
 名残の星月夜……………一五

## 舞踊脚本

新曲 浦島……………一七〇  
 夏狂 亂……………二〇三  
 寒山 拾得……………二〇八

七吉三……………二〇

## 兒童用脚本

小野の道風……………二二  
 烏帽子折と猿の群れ……………二七

## 翻譯脚本

ハムレット……………三三  
 ゼニス商人……………三八

## 小説

一讀 當世書生氣質……………三四  
 三讀 當世書生氣質……………三四  
 一讀 當世書生氣質(後篇)……………三九  
 諷京 童……………四五  
 細君……………四五

年譜……………四九五

ちんぽう  
しんぽう

い  
き  
は  
ら  
い  
は

あ  
ま  
あ  
ま  
あ  
ま

ふ  
ち  
う  
ら  
あ  
そ  
う

あ  
ま  
あ  
ま  
あ  
ま

あ  
ま  
あ  
ま

あ  
ま  
あ  
ま

はしがき

此の作、そのはじめ友人鶴田沙石子に研筋を語り、今より三年ほど前かたに、起稿したまへとすゝめしに基きて、同子が綴りかけて中絶せしもの六場ほどありしを、去年の秋うけとりて、若し能ふべくば、あらかたのまゝを補綴して『早稲田文學』に掲げばやと思へりしが、さても人の考へは心々にて、他人の綴りかけたるは、おのが案とは折あはぬ節いと多くて、その儘には筆を加へんすべもなく、まづ試みに序幕三場を走りがきに綴り添へて、それを『文學』の紙上に掲げ、やがて興の來るに任せて、澁君夢の場をもかきそへにき。さて後々の趣向などは、只おぼるげに立てたるのみにて、おぼつかなくも綴りもてゆくほどに、やう／＼筋立むづかしうなりて、沙石子の原稿は、悉く餘所になり、『桐一葉』といふ題號の外は、筋立も人物も、全く別仕立

となり了んぬ。随うてはじめ走りがきにせし序幕三場と、後の趣向とは、折あはぬ節もいでき、五六幕目を綴るころに至りては、我れながら前後不揃の感深く、幾たびも筆を投ぜんとせしこともありけり。辛うじて綴り果て、見れば、拙さいよく、著く、一たびは焼きも棄てばやと思ひたりしが、しかすがに未練氣生じて、此のまゝに打すてんもくちをしく、ふと思ひたちて春陽堂のあるじが許へ、わがしか／＼の作を出版せんの意なきか、若し出版の意あらば、餘りに矛盾したる節は、能はん限り修正して稿本を送らんとはいひやりぬ。儲け心の外に男氣ある春陽堂のあるじ、病中ながら快くうけがひて、すぐにも出版せんといふ。折から依田學海翁の綿密なる批評『讀賣』の紙上にいでて、我が作の拙きを正し、作者が心づかざりし缺點をも指摘する所尠からず。これにます／＼便を得て、餘も意も處々に修正を加へて、つ

ひに現形の如くになしつ。されど生中に、こゝかしこ無理なる筆を加へたれば、大かたははぎ／＼布子のやうになりて、或はもとの形よりさへ醜くなりし所多かるべし。就中文句の如きは、あとより入れし斧の痕、まぎ／＼と見らるゝ、我が見てだにかたはら痛けれど、今更に如何ともすべなし。あはれ、かく拙しとは心づきながら、初めて生みし子と思へば、不具ながらいとをしくて、嗚呼がまし／＼もおほしたて、かゝは世の人にひけらかすになん。

明治廿八年十一月初旬

修正の筆を擱する時

春のや主人

第一段

- (其一) 浪花城奥殿
(其二) 同奥庭茶室

第二段

- (其一) 吉野山櫻狩
(其二) 奥殿二女密訴

第三段

- (其一) 城内溜の間

(其二) 黒書院再評議  
(其三) 片桐邸

第四段  
(其一) 豊國神社鳥居前  
(其二) 同賣前

第五段  
(其一) 波邊内藏邸  
(其二) 饗庭局部屋  
(其三) 奥殿乳母自害  
(其四) 淀殿藏所

第六段  
片桐邸奥書院

第七段  
長柄堤談別

登場人名  
豊臣右大臣秀頼  
織田入道常真  
大野入道道軒  
片桐市ノ正且元  
石川伊豆守貞政  
木村長門守重成  
大野修理亮治長

波邊内藏ノ介  
片桐主膳ノ正(且元弟)  
波邊銀之丞(内藏介弟)  
今村三右衛門(片桐邸黨)  
十河十兵衛(同)  
本村清藏(同)  
神崎治右衛門(大野家來)  
白倉權六(同)  
野呂利珍(茶道)  
豊太閤實ハ石田三成  
増田右衛門尉長盛  
小西攝津守行長  
假面の奴實ハ佐々成政  
假面の奴實ハ豊太閤  
關白秀次亡靈  
淀君  
正徳  
大藏卿  
大藏局  
一葉ノ前(片桐奥方)  
小葉ノ車(奥女中)  
梶の葉(同)  
蜻蛉(且元女、腰元)  
椋鳥(腰元)

錦木(同)  
花野(同)  
初草(同)  
お虎(乳母)  
松丸殿

その他、侍士、侍女  
中間、亡靈、小姓ら若干名

第一段

(其一) 浪花城奥殿

奥かたづけの腰元ども、掃除しまうて寄りこぞり

「オ、しんど、オ、しんど、お目ざめにはまだ間がある、皆さん暫時休むまいか 二、そのオ、しんどで思ひだした、此の頃の遅いお目ざめ、日がな一日あのやうに、ちんとしておいでなされても、おからだが疲れるものかいな 三、サイナ、けふびは大野さまの、御忠勤とやらのせるでもなし 四、アコレ、粗忽な、きこゆるぞえ、皆さんも知つての通り、大佛さまのお鑑のことか

ら、徳川さまの御難題 五片桐市ノ正さまは、其の申し諫をなされうため、先達て關東へお下り、大藏のお局さまや、正榮尼さまも、後からお越しなされたれど、四まだ御吉左右が知れぬによつて、御前さまはいかい御苦勞、五夜もおちく御寝ならず、時たまおしづまり遊ばすと、四ナア花野どの、ゆうべも恰ど子の刻過ぎ、四、五、オ、氣味わる

ト顔色かへ、語れば一同目を回くし

二そんならやツぱり噂の通り、一「關白さまの怨靈や、三「御臺さまの幽霊が、二アノほんたうに、二、三、出るのかいな、四「サア、見ぬことゆゑ知れぬけれど、それは、氣味のわるいおうなり聲、二「エ、そんならもしやお長廊下へ三出るといふのも、一、二、三、ほんまかいな、五「サイナ、まだそればかりぢやないぞえ、二日ほど前の晩、あのお天守にけぶな狼煙、四「お星がおすべり遊ばしたの、五「箒星が見えたのと、四「けたいなことの續くのは、何か變事のある知らせと、四「概上人さまのお話、一「エ、マ氣味のわるい、變事とは何である、二「大風であらうか、三「大火事であらうか、四「もしや大地震、皆「エ、いふ間にふしぎや小簾、襖、ゆら／＼ぐわらぐわら、そりや地震と、あわてふためき一

同が、腰打ぬかす許りなり、うしろにぬつと剽輕もの

椋鳥、ハ、ハ、ハ、ハ、一「エ、地震かと思つたら二「またしても椋鳥どの、二そんなら今のは椋、ハ、ハ、ハ、ハ、〇あんまり怖がつておやしやすゆゑ、まさかの時の用心に、一寸試して、見たのぢやわいな、ハ、ハ、ハ、ハ、四「エ、憎らしい椋鳥どの、五「キツと學えて、皆々「おやしやんせいな、二「よいわいな、此の仕返しには、ナア初輩どの、ナツレ此間のあ的事を、二「ほんにそれがようござんす、皆「アコレ、此間のあ的事とは、二「ハアテ、そつちにおぼえがある、波濤様のおとうとご、三「銀之丞さまと御長廊下の薄くらがり、皆「アコレ、根も葉もないそのよなことを、二「イエ、根もないとはいはせぬぞえ、あの折立聴いた一部始終、二「今こゝでいはうかいな、皆「コレ、それいはれてならうかいな、二「そんならこゝへ兩手をついて、今のわびをしやしやんすか、皆「ぢやというて、一「いはうか、皆「サアそれは、三「エ、もどかしい、いつそのくされ、こそぐつてわびさすまいか、四「ほんにそれがよう、皆「ござんすわいなア

こりやたまらぬと遊げだすを、笑ひさどめき追うてゆく、入りちがへて右左、茶道野

呂利珍柏、奥女中小車、梶の葉

小「珍柏どの、小「小車さま、梶の葉さま、まづまづ首尾ようお三方を、小「アコレ、珍「氣だられぬやう内々にて、御案内いたしました、皆「シテ大野入道さまは、珍「程なく御參入でござりませう、小「それは重疊、幸ひけぶつさい、慶庭どののは、御代參のお役目とて、朝まだきより外出の用意、まづ、首尾ようまゐりました、梶「それはさうと小車さま、このごろの上様の御機嫌、さういふことにもお腹だち、疑ひぶかいお氣質とて、又一しほのおひがみ、困つたことでござりまするな、小「サ、それといふものもとは、大佛さまのお鐘の銘、腹黒な徳川さまの御難題、かて、加へてけふの一條、ほんに頼まれぬは人の心、ちつとも油斷が成りませぬ、それにつけてもお茶室の御密談、たが立聴くまいものでもない、珍「柏どの、萬事に氣をつけ、珍「心得ましてござりまする

密談なればへうしろより、ほんやりぬツと若衆まげ、渡邊内藏ノ介が弟、銀之丞、だしぬけにさしよつて、銀「ヤア珍柏こゝにおぢやつたか、皆「エ、珍「オ、さういふお前は内殿介さまのおとうとご、梶「オオ銀之丞どの、小「ほんにびつくり、二人しま



したわいの 兼何のびつくりすることがある、  
わしやワツとも何ともいはずなんだぞや○コレ珍  
柏、おぬしに頼んでおいたことを、けふまでも  
返事せぬは、わしを阿呆にするのぢやな 珍ハ  
ハ、阿呆にするがよく出来た、なんの阿呆  
にしませうぞいな 銀イヤ〜阿呆にするに相  
違ない、第一笑ふとは何ぢやい、人が腹を立つ  
てゐるに、笑ふとは何ぢやい、小アコレ〜、  
俵たしやんせ、何ぞといふと刀の瀬、お前はマ  
ア氣が短い、ほんに何やらほど怖いものはない  
わいな 梶、ほんにマア、どういふ頼みかは知ら  
ぬけれど、棄てて置いたはお茶道がふつつか、早  
う詫びをしたが勝ちぢやわいな 珍、いかさま、  
かつたいに棒打とやら、これは愚老が誤りまし  
た、が其の頼みの一條、コレ銀之丞どの、こゝ  
でぶちまけても大事ないかや 銀ウ、大事な  
大事ない、此の間おぬしがいうた、首尾とやら  
は出来たかいの 珍、ハレヤレ、さう無遠慮では  
とツともう痛み入る、ナモウシ小車さま、なぜ  
人間は、皆こんな風に生まれては來なんだか、  
このはうが手ツとりばやくて、ずんとましでご  
ざりますわい、ハ、ハ、ハ、ハ、小ホ、ハ、ハ、シ  
タガ銀之丞どのや、一體頼みとはどんな事ぢや  
ぞいな 銀、サイノ、聞いて下され、此のやうな

こというたら、又お前がたは笑ふであらうが、  
わしやちツともをかしようないぞや 小何の笑は  
うぞいな、ナア梶の葉さま 梶、サイナ此の通り  
二人眞面目ぢやわいの 銀、そんならきいて下さ  
れや、わしはノ、片桐市ノ正どのの娘の、アノ  
かげるふをナ、どういふ譯でやら、始終顔が見  
てゐたいによつて、どうぞ妹にしてほしいとい  
うたら、母者が、それなら女房に貰うてや  
ろ、といはしやつたゆゑ、女房にしたら尙ほの  
事、始終顔が見られうかと思つて 梶、小ホ、  
ホ 銀、それ〜、笑はしやる、モウいはぬ〜、  
梶「ア、誤つた〜、堪忍々々、モウ決し  
て笑はぬわいの 銀、それからわしが、そんなら  
貰うてといふところ、親御の市ノ正殿が、ど  
うしても得心しやらぬとやらで、ツイそのまゝ  
止めになつてしまつて、それからは以前とちが  
ひ、御殿で毎日のやうに蜻蛉にあつても、なぜ  
かつツケンと、つれないそぶりばかりしやるに  
よつて、わしや悲しうて心細うて、此の間も  
たツたひとり、お長廊下で泣いてゐたら、そこ  
にゐる珍柏が、いろ〜やさしういうて、近い  
うちに首尾といふことしてやる程に、其の代り  
珍「ア、コレ〜、そのあといふには及ばぬ、  
あんまり氣の毒と思つたゆゑ、首尾するとはい

うたものの、ナ申し、お二人さま、何やらにつ  
ける薬がなつて、アハ、ハ、ハ、ハ、銀、ぢやによつ  
て、其の薬の代とやらに、あれほど小判とい  
ふものを 珍、ア、コレ〜、ぢやによつて其の  
薬をオ、噂をすれば影とやら、アレ〜、  
お廊下へ蜻蛉どのが 銀、エ、どこに 珍、ソレソ  
レ、あそこ 小成る程、これは難病ぢやわ  
いの、お茶道がもてあましたも尤も、ナウ銀之  
丞どのや、お前の頼みは、人傳では叶ひにく  
い、今にもこゝへ蜻蛉が見えたら、自身でさう  
いうたがよいわいの 梶、ホ、ハ、ハ、ほんにそ  
れが早手廻し、なぜ直づけにいはぬのぢやぞい  
の 銀、デモ何ぞいはうとすると、ツイつうと立  
つて去にやるものを 珍、それはお前が下手なゆ  
ゑぢや、さうとうしろから忍んでゆき、まづ羽  
がひじめというてナ、かういふ鹽梅に抱きしめ  
てノ、それから根氣よくくどかうなら、逃がす  
氣づかひはないわいの 銀、そんならわしがさう  
いうたら、以前のやうに蜻蛉が、やさしうして  
たもろかいの 珍、オイノ、今いうたやうに、抱  
きしめておいて、それから、根氣よくくどけば、  
東でも蛇でも、なびく、ウ、キツと、なびく  
なびく 梶、アコレ〜、よい加減にしたがよい、  
眞實にしかねぬぞや 銀、ヤ、ほんまぢや、アレ

アレ、あそこへ蜻蛉が、アレこゝへ來やらうわいの 珍、ホイヤレ、誰からでた實ぢや、こいつはうツかりこゝにゐて、かゝりあひになつてはたまらぬ 小「ほんに御用を忘れてゐた 親、ドレ、奥へまゐりましょ 銀「ア、コレ、珍柏、まつても、コレ、まつても」

逃ぐるが如く三人は、奥の方へぞ入りにける

銀「ホイ、みんな往んでしもた、どうせうぞいどうせうぞい、かうしておれが立つてゐたら、又ツイと去にやるである、こりやかうしてはをられぬわいの

ひとりうろたへ御簾かけへ、かくるゝ間もなくかなたより、市ノ正がむすめかげろふ、振袖姿急ぎ足

鯉「日頃意地わるの大野さまと、波邊、石川のお二方が、折も折とお茶室にて、人目を忍ぶ御密談は、どうでも只事ではないわいの、かういふ時の後る楯に、頼まう 筈のお方はあつても、エ、まゝにならぬものぢやなア、それにつけても 正、茶尼さまと大藏さまは、ゆんべ運うお歸りぢやげなに、父上さまは何してぞ、ひよんな噂を聞くにつけ、気がわくゝしてならぬわいの、せめて饗庭のお局さまに、わけをはなして、

さうぢや〜

かけゆくうしろに銀之丞、無言でしツかととどむる袖

鯉「ヤお前は銀さま、コリヤ何となされます銀、何ともせぬ、たんといひたいことがある、かげろふどの、どうぞそこゐて下されいなう 銀「エ、マそこ離して下さりませ 銀「サ離せなら離さうほどに、つい立つてゆくまいぞや 鯉「サア用があらばきくほどに、マ離れてゐて下さりませ〇サ何の用でござりますえ 銀「サその用はな 鯉「その用はえ 銀「コレノ、そもじと始終一所にゐたい 鯉「エ、モすかぬ、其のやうなこと知りませぬわいな 銀「マ、マ、まつて〜、そのやうにもぎだうにいやると、わしや悲しうてならぬわいの、コレ拜む、きいてたもいの〜

鯉「エ、マイ、やらしい、知らぬわいなア 銀「うんといやらねば、やらぬ〜 鯉「エ、用がある、そこ退いて 銀「イ、ヤ退かぬ、退かぬわいの

ゆかんやらじと争ふうち、此の體道目に椛鳥が

椛「かげろふどの、召しますぞえ、かげろふどのかげろふどの

よい逃げしほと突きはなし、逃ぐるをおはへる銀之丞出あひがしらに飛びくる椛鳥

椛「銀之丞さま 銀「ヤ椛鳥か 椛「銀之丞さま、お前はなア〜、ようマア此の間は知らぬ〜

とおひひやつて、ほんに〜今のしだら、ようわしをだまされやつたの 銀「おりやだましたおぼえはない、椛「ないことがあるかいな、エ、モくやしい、くやしいわいなう

我れを忘れて胸づくし、こなたは短氣のむかばらち

銀「エ、何しをる、慮外もの、切つてしまふぞ、きらりぬいたる刀の光、始終うかゞ野呂利珍柏、あわて驚きはしりいで

珍「ソレお出座ぢや〜、お目につくと曲事曲事、ちやつと逃げた、早うかくれた、逃げた逃げた

トおどかせば、二人はあわて右左、ぼつたておつたて、あと見送り

珍「ハレヤレ 阿呆には困り切る、シタガ 阿呆でもうつけども、あの道ばかりは一人前、ハテ争はれぬもの、といへば、争はれぬは金の威光、此の野呂利珍柏老、きのふまでは饗庭のお局のふところ小刀、けふから案を立て直し、御褒美が大野さまのお身方、これを思へば片桐さまが

關、東方へつけけ句、ハテさうでもありさうな、饗庭のお局は、片桐さまと親句のなか、うツかり

脇へ付いてゐたら、ツイ同類と思はれて、果は  
首切、禁句々々、そこを察して愚老が頃留、ハ  
テ我が身ながら名案だわえ

推敵なけば饗庭の局、打かけ姿しとやか

響お茶道 珍、エ、ヤあなたは饗庭のお局さ

ま○まだお、おでかけてはござりませぬか

響ハテ仰山な驚きやう○御代參の件まはり、

支度よくは今よりすぐに 珍、ハイ、申

し附けるでござりませう

行かうしろかげつく、と

響今がたチラとき、し噂といひ 珍、エ 響、ハ

テ申し附けて下さりませい 珍、ハイ

(其二) 奥庭茶室

華美を盡せし茶室の結構、植込しげる築

山のだら、をり、かなたにのつべり根

ぶかは石、大野修理亮治長、こなた角た

つ苔むす岩、ぎつくしやつく石川伊豆守

貞政、おりかけし茶室の前、足かみしもに

一刀ぎし、渡邊内蔵介たちふさがり

渡、アイヤ伊豆守どの、お家にかゝはる一大事

の密談に、自儘の中座緩意でござらう 石ヤア

緩意とはき、ごと、君命なら知らぬこと、身不  
竹なれど石川伊豆、御分らのおとがひで、指圖う  
ける謂はれはない 修、マ、しばらく、只今我々  
が申せし條々、御連存とあらばそれまで、只あ  
の片桐市ノ正、ふた心の證據は明白、このまゝに  
致しおかば、お家の滅亡は目のあたり、さりと

て表沙汰にいたすときは、織田入道をはじめ、  
關東に心を寄する二股武士、御城内に勤から  
ねば、毛を吹き疵を求むるおそれ 渡、そこを存  
じて此の内蔵介、修理どののもとも晝夜の苦心

五、ヤアさほどまでの忠臣が、なせまづ我が君へ  
は言上せず、ほしいまゝの成敗沙汰 修、サ、  
それぞ繰返し内蔵どののいはれし所、御母公は

女儀の疑ひ深く、彼れ此れと御蹴躑、我が君は  
御母公次第、兎角に間どる其の間に、計りごと  
洩るゝときは、城内忽ち騒動なし、織田、

速水、木村など、日ごろふた心を抱くやか  
ら、或は關東へ急使をはしらせ 五、黙りめさ  
れば 渡、或はこれを好いしほに、我々共を譏言な

さば、修、げに内蔵どののいはるゝ通り、君の御  
柔弱を幸ひに、石ヤア黙らッせい、我が君を御

柔弱とはどのおとがひ、まツた忠臣の木村、速  
水を、ふた心とは何を證據、忠臣は御分らばか

りか 渡、これはまた通らぬ豆州、ハテ禮儀は禮

儀、實は實、眉毛に火のつく相談に、腐れ儒者の  
句穿鑿、エ、馬鹿臭い 五、ヤア實とは何が實、  
二言といへ、手は見せぬぞ 渡、過言なり伊豆守、  
ともすれば刀の鯉口、武士の手に珍らしいか

石何がなんと 修、まゝ、しばらく、  
伊豆どのの立腹、サ、ま、もつとも、いか  
にもこれは我々共が申し誤り、我が君を御にう

じやくと申せしは、全く以て申しあやまり、ま  
ツた速水、木村の兩士を、サ、いかにも貴所  
のいはるゝ通り、忠臣にまぎれなし、ふた心な

どと申せしは 渡、ヤア不覺なり修理亮どの、所  
詮不得心の 修、サ、不得心などと存せしも、  
まつたく邪推、ナツレ邪推、大野修理亮、まツ

この通りおわびいたす、ぢやによつて御兩所  
とも、此の場はこのまゝ、平に、  
二人を引きわけなだむれば、尻目に石川面

ふくらし、ゆかんとしたる後ろの方、聲か  
ち先きに木かげより  
道、アイヤ豆州、しばらく、

伊豆守立ちとゞまり  
石フム、何人かと存じたら、貴殿は大野の御老

體、何ぞ御用ばしござるかな 道、されば極内の  
御用談、お手間はとらせぬ、マ、これへ、○  
イヤナニ倅、先刻よりお召の御模様、そちはお

表へ、また内蔵どのには、ナソレあたりへ

目ませを心得入るあとの、茶室へ案内し、

四下を見まはし

道お呼び止め申せし慮外、御ようしや下され、只

今圖らずも参りかゝり、植込ごしに承れば、

俣は勿論、内蔵介が無分別、御立腹は尤々、

しかし彼等とても、畢竟お家を思ふの餘り、何

事も君のおん爲と御勘辨、遺恨ござらぬやう、

伊豆どの、取分けてお頼み申す。石改まつたる

御挨拶、伊豆ほとく赤面いたす、それがしと

ても一時のいひがかりに短慮の口論、只今と相

成り、道ア、イヤ何のく、日頃正直のそこも

とゆゑ、金鐵にひとしき速水、木村を、なまく

らかと疑ふ廻り氣を、氣にさへられしは尤も五

極、もれ聴きし此の入道も、おぼえず歎息仕

つた、かく御城内の人心、互ひに疑惑をいだ

き、目に見えぬ犬を放ち、心の關設くるかと存

ずれば、太閤殿下の御餘光も、薄う相成つたと

存ざられ、六十二歳の老眼に、不覺の涙を、た

たへ申した。石御述懐、お察し申す、早速なが

ら承りたいは、市ノ正が一條、修理亮どのに

承れば、彼れ本多佐渡と心を合はせ、まづ

御母公を人質として關東へ下しまひらせ、おひ

おひ當城を掌にし、果は我が君をもおしこめ

奉らん企とか、萬一治定ならば、ゆゑしき

御大事に候へども、伊豆いまだ半信半疑、此の

儀について御老體は、道さればく、その市ノ

正の一條、何分まことしからぬことと、愚妻大

藏が立歸り、直々の知らせをも信けかね、必定

何者かの讒構と存じ、石げにく、道七たび索

めて人を疑への世話もあれば、今朝愚妻が同行

せし正榮尼に對面なし、根根り葉ほり尋ねしと

ころ、ア人心は盛衰によつて、掌返す間に變は

るもの、利慾の下、人肉糞に集る蠅と、性根だ

この出来るほど心得をりしが、ナニガ助作の

昔より、故太閤の鴻恩を蒙り、加賀侯逝去の後

は、執權職をも承り、我が君を袖佐し奉

る市ノ正、さやらのさもしき心底、毛頭もあら

う管なし、察する所、これ全く關東方の、或

は反間の計略かと、石げにく、さもあらん、

さもあらうと存じ申した。道サ初手ほどは存じ

たれど、はかりがたきは老後の慾念、我れ人共

に血氣さかりは、只管名を惜しみ、一命を叩の

毛と輕んじ、忠義を磐石と存ずれど、功成り名

遂げ、目に見えぬもの足れば、目に見ゆる不足

に目が着き、先がつまるにつれ、死愈といふ執

着萌す、ガこれとても凡夫の根性、彼の市ノ

正などは、恥を知り、忠を存する男、よもかゝ

ることはあるまじくト申すと、愚妻も正榮尼

も口を揃へ、聲をひそめての極密ばなし、げに

顔に似ぬは心、あまりのことに此の入道、驚

き入つてござるてや、石とはまたどのやうな、

いかなる儀でござりまするな

せきこむ石川、おちつく道軒、あたりとつ

くり耳に口

石フム、スリヤ大御所が媒介にて、道ひそかに

ひそかに、驚くはそれのみならず、さすがに正

榮尼分別細かく、鞍馬に滞在申、阿茶の局とい

ふに、入魂となりしを幸ひ、よもやまの話の

序、問ふにおちず語るにおちし、彼れが陰謀の

一部始終

又石川が耳に口

石フム、スリヤはじめよりその心にて、道日

ごろ御城内の内證、善惡とも筒ぬけを、合點ゆ

かずと存じをりしが、皆此の犬が遠吠えと、遅

蒔きにさとりし後悔、さればこそ先年も、加藤

肥州をあさむき、お氣に召さぬ千姫どのを呼び

迎へ、奥御殿に浪風起し、まつた御母公の御意

に逆ひ、強ひて我が君をば、二條城へ誘ひまゐ

らせ、あはやおん大事に及ばんとせしを、假令

正直の加藤肥州が、同腹でなかつたりやこそ、

思ひいだすも肌へに粟、近くば大佛殿の供養、

停止沙汰も鑑の銘も、かね／＼打合せし機關ならん、尤も、かく心づく上からは、元巢の知れし土蜘蛛、いかほどに綱張らうと、かつつ恐るゝには足らざれども、目前に一つの難儀は、おん人質の一條なり、これは關東の古狸と、彼の古狐がなれあひの奸策、御母公はじめお附き人がげぶた、體よくおひらはらん算段とは、目の子勘定ついたれども、着かぬは關東へ返答の落着、彼の者當城に在る間は、何事も皆筒ぬけ、こゝが思案の關でござるテ

苦心の顔色、呆るゝ伊豆

吾驚き入つたる彼れが奸策、にツくきは徳川の古狸、此の上は何延引、速かに逆城市ノ正が素ツ首刎ね、御親文を以て諸大名を招き、關東征伐仰せいださるゝの外はござらぬ、道サ、戦ひは第二の手配り、邪は正に克たずの本文、取分け當城は無雙の要害、いざとならば勝利は治定、さすれば必勝は急ぐに及ばず、只心懸りは獅子身中の蟲、互仰せではござれども、たかが老いぼれの市ノ正、歸城次第ひとつらへ、罪狀透いひわたし、誅戮あらんに何の手間ひま、道イヤ／＼、理不盡にひとつらへ、首はねたらば知らず、一たび口を開かすれば、驚を鳥は彼れが得手もの、助作といッしころより、

故太閤に隨ひ、戰場の手柄こそ多からざれ、敵國へ使者となつては、中々の曲者、當今關東の本多佐渡と、鳥居數爭ふ古狐、疑ひ深き御母公の弱味へ魅入り、まツた我が君を御幼少よりまるめつけし舌さき、理を非にまけても實らしく、上の御心を迷はす時は、毛を吹いて疵のしつべい返し、我々疑ひを棄るは勿論、關東へ機密一切洩れ、軍の手配り成らぬうちに、遊奇せせられなば、身方の大不利、石しからば入道の御所存はナ、道されば明日にも歸府いたさば、まづさりげなく出仕いたさせ、君、御母公、御出座にて、此のたびの件につき、キツと御糺明は無論の手筈、さていひくるめ退席するか、或ひは御不興蒙るか、いづれにもせよ、そのまゝ、放ち歸さんば、手負ひ虎を放つも同然、ぢやによつて愚老が憂慮、殆ど思案に暮れ申すぢや、互いかさま○此の上は只一策、下城をまちうけ只一刀、道イヤそれもまだ萬全ならず石スリヤ、いかゞせん御所存、道イヤカニ、豆州、御分君の爲に一命抛ち、奉公仕らん所存なるか、石異なお尋ね、いふにや及ぶ、道ホ、あツばれ、その心底見る上は○コリヤ、ナ、ナ、互フム、すりや殿中にて彼奴を怒らせ、道シイ、コレ、機密々々

### 第二段

(其一) 吉野山櫻がり

かりの世を、夢まぼろしとみよしのや、盛り春に春添ふる御遊の場に花ぞろひ、五人の御臺所、假屋々々の風流陣に、情氣まじりの魂膽を、引きわたしたる幔幕は、日もあやにしきだんだら染、わけて色濃き淀君御前、けふの御遊をかねてより、まつ丸の諸共に、工夫とり／＼智略の方針、さしあたり北の政所に鼻あかせ、そのかた組の三條どの、同じ匂ひかゞのお局、しよげさせて興せんと、其の口まではひしがくし、けふ御假屋の東の南北、花爛漫たる枝々に、吊す黄金の鈴千萬、春風わたつて、から利の、組み練なびく有様は、いかなる蜘蛛の蟻れぞ、遠山がすみ引きわたす、さほ如神も鼻じろみ、月もおぼろの夜げしきや、現には見ぬ詠めなり  
幔幕の、うちぞゆかしき花の花、淀の君にこやかに

「松の丸どのを初め正榮尼、大藏卿、皆のしゆの骨折にて、思ひしに増す萬づの管、今にもあれ、我が君こへおこしあらば、御褒美のお詞は治定ぞや、これといふも畢竟は、みづからを思つたも人々のまごころ、忘れはおかぬ、嬉しいぞや」

あふる、ばかりの御愛嬌、松の丸どの鼻たかだか

「こがねの鈴にからくれなるの、いと目ざましいと申さうか、うつくしいと言はうか、ほんに又と天が下に、類ひない密のお思ひ付、けふ知つて皆鼻あこ、なんぼ政所さま最辰の三條どのも、此の御趣向には我が折れう、早う我が君に見せましたい、常から豪奢をお好みゆゑ、嘸お悦びでござりませうわいな

いふ尾につきき、正榮尼が分別貌

「正」今「今日は朝鮮征伐御勝利のお祝ひにて、例ない無禮講の御催し、御寛瀾の上さま、定めし何ぞあなたにも、御趣向はしござりましょ、こゝにチンとしてお成り待つ間、からばかりも智慧が無い、ナウ大藏卿、なんぞ才覺がありそなの、大「さればいな、夫美濃守が口癖の話、孔明とやら張良とやら、敵大ぜい寄せし時、橋の上つて琴を弾き、門を開いておいた

ゆゑ、敵兵は呆氣に取られ、計略でもあるかと、智慧まけて逃げたとやら、それとはかかれど、窓と幕の中を空洞にして、一同はあの櫻の蔭、正「ホ、ホ、ホ、かくれてゐて、バアとばし言はうでの、大ヤア何と正榮どの、半分いはさず無禮すぎたその差出口、たが其のやうな小兒だまし、なんぼ前さまが御發明ぢやてて、コレあんまり他を見くびるまい、正「ホイこれはしたり、マ興がる、いつわたくしが發明顔、大ッレソレ、その顔が發明顔、角だつ角もじ女もじ、右と左、奴の、如在なかとる泣のかた

「泣」アコレ、二人とも何ぞいの、大藏が趣向の底、どうやら面白さうなれど、若し間違つて我が君が、仲洋とやらのやうに、お逃げ遊ばしたらひよんなもの、シタガ暮のうちを空にして、不意撃とはよう出来た、孔明が琴に做ひ、腰元共はあの櫻蔭で、琴蛇皮線、笛胡弓、松の丸殿はそのお指圖、又大藏と正榮尼は、みづからが偶と思ひ付の相談あひて、智慧貸したものの、さりながら、總して計略は密なるをよしの山、身方にもいはぬが花、はなしの仔細はあちへ往て

風情ぢやなア

田右衛門

ぼく御感の御ん詞、たゞ註脚をます  
増げに朝鮮軍御勝利の、そのお祝ひに打つて  
つけ、テモサテモはでやかなる御ん趣向、山の  
名もさいさきのよしの山、はなの先きに星にま  
す黄金の鈴、一歩ごとに月影を、踏ませらるゝ  
御全盛、取りも直さず居ながらに、天上界の御  
遊のさま、小、まことに右衛門の申す如く、月の  
都の莊嚴も、此の景色にはいかで、及び  
もなき淀の御ん方の御工夫、恐れ入つたる御發  
明、外大明の御んあるじと、仰がれたまふ我が  
君は、文字のまゝに大日輪、内を照らしたまふ  
賢婦人の御ん方は、月の都の御んあるじ、嬉  
娘にまさる御んよそほひ、まことに是れ萬歳の  
御祝儀

さすが小西の小文才、耳學問は唐じたて、短  
長あはす行長が、詞の尻尾ひつとつて

増一月の都の君さまが、嘸かしのお待ちかね、  
我が君にはいざまづあれへ、太、右衛門、攝津、  
皆の者、まゐれ

ト大やうに、折から奏る音楽の、音色につ  
れて續りゆくや  
太閤、席に着きたまふ、程もあらせず右手

女「退りや」

ト女中の聲々、てんでに揮ふ櫻木の、枝を  
くゞつてはら、落花すつぱり緋縮  
緋、頭巾の下に能面、尻ひつからげ一本さ  
し、腰に印籠伊達奴

甲奴「イヤちくどんべい然う易うは退るまい。

天下晴れた無禮講、推參はけふの祝儀、音にひ  
びいた淀のかた、淀の川瀬の、かはせの、  
盃くれるさ、飲みますべい、淀の車は水ゆゑ  
に、おれは酒ゆゑ目がまはる、酌を

ト傍若無人

女「テモ大それた慮外者、あんまり圖ない無禮  
講、御前間近が目に見えぬか  
其の面刺がんと女共

太「コリヤ、待て、苦しうない、身が面  
前をも憚らず、淀の酌所望とは不敬奴、その  
膽だま氣に入つた、誰れかある、盃與れい」ハ  
ア

ハツと仰せを奥のかた、正榮尼、大藏卿、  
かねて準備の銚子さかづき目八ぶん、腰元  
共がとりんに

女「冥加にかなうた奴どの、有難いお盃、サ  
アいたじきや

ト聲の下  
乙奴、まつた

トとんきよ聲  
乙「奴冥加の報謝酒、正客はこゝに、  
正客こゝにトつんでは、頭巾もおなじ  
緋縮緋、對の衣裳、對の面

甲「ヤこりや、甲、乙、どうぢや  
ト顔見あはせ

甲「おれが汝か、乙「汝がおれか、甲「頭巾から衣  
服、乙「印籠から一腰、甲「汝が面、乙「うぬがつら  
甲「よう仰せたナ、乙「よう眞似たナ、甲「こいつう  
さん、まがひものめ、乙「うぬ一評議

ト腕まくり  
かなたの幕のかけよりも  
馬啼ましたしやんせ、その鑑定は、わたしに任せ  
て下んせいなア

走りいづる女馬子、廣ふり袖や頬かぶり  
増「ヤア御前近、尾籠奴、すさりをらう  
トいさまく増田

太「イヤ叱るまい、賤には惜しき爪はづれ、  
ヤイ女、見事その二疋、馬か鹿か、極め、  
馬「ハイ、殿さん御免なませ、總別伯樂が  
ならはし、鼻相る、目を相る、足を相る、それ  
からソレふぐり、さりながらこれは人、殊には

目ない、鼻とてもかくれかんじやう、見やうにも足ばかり、まだ、一つ残つたは、ナどうも、ぢやによつて妻が工夫は、コレちの奴どの甲ナイ馬そちの乙ナイ馬疑られた面晴れに、ナふらんせ 甲ふれとは 乙槍か馬しれたこといな、ふつたら出よう骰子の目き、マアそんなものぢやないかいいたア

利發さや

本ホ、面白し、ソレ誰れかある、囃子々々

ト鶴のこゑ、雀をどりや槍をどり、近侍が心得もちいづる、いつの間にやら槍二筋

甲ヤレしよことがない、ヤイ贖ひもの、うぬがごたい持出せる 乙「オ、サ僞奴、汝も出をろ

さ甲「でをろさ 乙「でをろさ 甲「まッかせ 乙「ど

ツこい 淨ふりだすや、とッかけべい、先のけろ、おなべが買ひ餅ねれたらもてこい 淨「がッ

てんだ 淨「ゆるべも三百はりこんだ、裸でどうちゆがなるものか 淨「これも誰れゆゑ 淨「お敵

が 甲「おてきの 乙「コ、ハ、ハ、ハ、○コリヤハア、してこいな、どツこい、ふれ、ふり

こめさ

ふりこむ槍さき御座さきへ

馬「アあぶな

シヤマツ械になりふりも、女だてらや色さかり

馬「馬やる、尻り馬やる、またしやんせ 甲「のけるさ 馬「のらんせ 甲「のけるさ 馬「イヤ、酒」とかく浮世は色酒の、飲みやれ歌やれさきの世は闇よ、今は半ばの花さかり 淨「かげになり

たやおまへのかげに 甲「コリヤどツこい トふりだす槍、さてこそ胡亂と小西が眼力

小「ヤア心得ぬ、奴がふるまひ、御油斷あるな、方々

いふやいなづま槍の鞘、ぬくよりはツし殿下の胸板、あツと玉ぎる御んなきがら、スハ狼藉とみぎ左、にげちる男女、以前の奴

甲「ウハ、、、、ひごろの遺根今本望、猿くわじや思ひ知つたるか 増「小「逆賊やらぬ ト増田、小西

甲「シヤこさかしき網裡の魚、これを見よ 下腰の印籠、大地へ轟然あひづの狼煙、俄かに陣がね攻め大鼓

甲「ア、ラ怪しや、貝がねの、音色がちがつた、ヤ、、、、コリヤどうぢや

ト呆る、奴、なきがらムツクと豊太閤 太「ヤアおろかく、佐々成政、かくあらんと存ぜ

しゆゑ、御身代りの石田三成、大明王の倒れしは、朝鮮軍のさいさきよし、コレ此の通り

ト假鬚髯、袍も冠もかなぐり、五「刃びきの槍尖うけて見よ 突きだす鹽首ムツと取り

甲「圓の、と思ひしに、かへつて汝らに、チエエ無念な、此の上は死物ぐるひ

猿くわじやいづこと忿怒の形相、頭巾も面も

ぬきすてて、以前にかはる威儀堂々、右手には頭巾

うしろには勇士ひきつれ豊太閤 太「めづらしや佐々成政、流が智略にちこちは、汝を取り巻く廿重十重

十二ひとへや濃いくれなるの 淀「もはや叶はぬ、観念々々

廣ふり袖にあらなきなた、小脇にかいこみ流のかた

太「われはこれにて見物なさん 淀「みづからはおんかいぞへ

かなたをキツと覆しさや、げにこそ流のみだいどころ、氣高うもまた勇まし、無念々々と佐々成政、白刃を肚にひきまは

す、だんだら幕はなきがらを、かくすみや



かに收りし  
太皆これ流が才智のいきをし、ホ、出来した  
り、あつばれく

石田三成兩手をつき

石げに我が君の御説の如く、申すも恐れ多  
れども、今いにしへに例なき、賢婦人の御  
方さま、かゝる御内助まします上は、大明は申  
すもおろしや、シャム、ルスン、オランダもイ  
ギリスも、遠からず御手のうち、皆臣等一同  
女皆かざりませぬ妾共も、皆おいはひ申  
し上げます

萬歳祝ふ聲々に、三吉野ゆする計りなり

そのなかに、ひとりしよんぼり淀のかた、  
力なみだにくれの秋、雨にやつる、柳葉  
の、しをればたる御風情、殿下ふしん  
のみけしきにて

太これはいかに、何わびたまふ、此のめでたさ  
も楽しさも、皆そもじがいさをしと、一同がい  
はひ、大明國取りしより、嬉しいと思ふ此の秀  
吉に、何遠慮、ナウ淀、心地でもわるいか、氣  
にそまぬこともあるか、何事をむづかりたま  
ふ、コレどうぞの、癪へか、腰か

背さすらんと御ン大將、やうくにおしへ  
だて、只さめくと聲くもり

逆、物體なや、ごしんもじの御ンなさけ、うけま  
ゐらする我が身、此の上は何不足、あつばれた  
ぐひなき豊臣の、榮華につるゝかたづけなき、  
嬉しいと思ふにつけ、杞憂は女心の淺ましや、  
千丈の塊もありくと、行末の崩れ案じられ、  
接ぎ木の枯れて幹も根も、朽ちや果てなんざり  
ながら、むづかしいは世の口の端、生中此の和  
子のあるゆゑに、お家を思ふまごころも、ねた  
みそねみの讒言と、さぞ方々の御ンまはり氣、  
とはいふものの此のまゝに、打棄てゝは置かれ  
ぬ大事、此の上は心の潔白、いつそのことに此  
の和子をば、たゞ一思ひに亡きものとし、それ  
から後に御訴訟と幾たび思ひ定めても、つらや  
絶たれぬ恩愛の、絆は念か、黒金かいなう  
かッばと臥して泣いたまふ、其の懷ろに  
嬰兒の、わツとなく聲  
淀「たがよ、いとほしや、さりながらいつま  
で不練、執着も今限り、お家の大事に何かへう  
ぞ、南無阿彌陀佛  
トふところ刀  
太「ヤレ早まるな、亂心か、アレ止めよ治部少  
輔、秀頼のけい攝津守、逆その仰せこそは情け  
が仇、生中此の兒がひかへづな、さる御ン方の  
御放埒、聞えまつらん由もなく、國民擧りて怨

訴の聲、野にみち、途に横はる、孕女のあへ  
なきがら、齒をくひしぱり睨みつめし、怨みの  
末や天罰の、果はいつこにかゝるらん、石かゝ  
る暴虐おはする由、今滿天下の普き取沙汰  
夏の社稷も架に亡び、殷の礎も、紂が不道  
に崩れし例、小「まことに治部少輔が申す如く、  
恐れながら彼の方さまの御ンふるまひ、階の場  
帝が壯時にまさる御亂行、親子の女を右左に、  
おしならべて寵したまひ、肺林酒池の御ン遊  
び、あまつさへ故なくして、専ら殺生を嗜ませ  
たまふ、増「これ京童が口々に、殺生關白と  
そしりの權輿、正今は怕れて人皆が、聚樂の御  
所には鬼棲むと、夕日斜のころよりは、往來稀  
なる御ン悪行  
小西、増田、正榮尼、大藏はじめ一同が、  
かはるゝの御ン訴訟、秀吉公は默然と、  
御思案深き夜半の月、おぼろゝとなる鐘  
は、峯か麓か物すごく、こうくとこそ聞  
えけれ  
淀「さては尚ほしも御ンうたがひ、此の上は何  
ちうちよ、秀頼こちへ  
ト御ン母公、いだき寄せんとしたまへば、  
アラ不思議やおどろく、月はいつしか  
雲隠れして、幾百千株の櫻が梢、見るく